

古代律令制下の出雲をめぐる国際関係—渤海との交流を中心に—

大日方 克己

1. 古代律令国家の国際関係

(1) 律令国家の対外関係の概要

- ・唐・新羅・渤海国家間(君主間)の公的関係を基軸とする。原則、公的に管理された国際関係。
- ・公使(朝貢使)の派遣、交易は公的関係に付随。
- ・日本の公的交流ルート 唐・新羅—大宰府(博多)—瀬戸内海—難波
→渤海に対しても大宰府来航を要求
ただし渤海使が大宰府に来航した例なし。遣渤海使が大宰府から発遣された例もなし。

(2) 律令国家の対外関係の中での山陰の位置

a) 新羅との緊張関係の前線

- ・新羅と日本律令国家の関係—国家間の緊張関係、9世紀には新羅流民の漂着、新羅海賊の襲撃(いずれも北部九州)
→新羅に対する軍事的・宗教的対応の前線として西海道(九州)・山陰(とくに因幡～石見)

b) 渤海使の来着地の一つ(9世紀)

2. 渤海と東アジア国際関係史の概要

(1) 渤海の成立

- ・7世紀末 大祚榮が政權樹立 大祚榮…高句麗遺民。高句麗滅亡後、東北にのがれ靺鞨諸族を支配し自立。
- ・8世紀初頭 唐から渤海郡王に冊封

(2) 渤海の展開と日本

- ・8世紀前半、一時唐と対立。唐・新羅と戦闘。
- ・その後、唐との関係修復、頻繁に遣唐使・留学生を派遣、唐の政治制度、文化等受容。都上京龍泉府を中心に発展。
- ・新羅との政治的・軍事的対立は継続→日本へ接近。

8世紀の渤海使は武官が多く任命。对新羅関係を意識した政治的・軍事的連携を求める。

- ・9世紀、新羅王権の弱体化、政治的緊張緩和→儀礼的外交、経済的・文化的交流への変化。

渤海使は文官(文人)が多く任命。漢詩の応酬。

交易活動 渤海がもたらしたもの…毛皮(黒貂)など。

日本側からの多量の返礼品(絁、綿などの繊維製品(現物貨幣))

→渤海側にとって多大な利、数年ごとの頻繁な来日。

→日本側、12年1貢を要求する。入京させず来着地から放還される例もくる。

*「放還」の意味…単なる門前払いではない

来着地で数か月、「安置供給」。その間に、国書などの写しを太政官に送り検討して、入京の可否を決定。否となれば、国書・信物は受け取らず、来着地から帰国させる。

→国書の内容、各種情報等は太政官に伝達される。渤海使も来着地で供給をうけ、交易等は可能。

(3) 渤海の滅亡とその後

926 渤海は契丹に攻撃されて滅亡。契丹は、耶律阿保機の子突欲倍を王とする東丹国を置いて渤海故地を支配。

* 930 東丹国使裴璆来朝。渤海の滅亡、東丹国の成立を告げるとともに、東丹王を非難。

→日本政府は、東丹国との外交拒否。裴璆に過状を提出させる。

裴璆は、908、919の2回渤海使として来日。父裴通も882、894の2回来日。

930 東丹王が後唐に投降、東丹国消滅→以後、渤海を継承する国家なし。

2. 渤海使来朝の様相—日本・渤海関係のなかでの山陰の位置

(1) 渤海使到着地の変化

- ・8世紀 出羽～北陸 山陰は一例もなし。遣渤海使の帰国で隠岐に漂着した例はある。

- ・9～10世紀 北陸～山陰 越後以北は一例もなし。

出雲3回、隠岐→出雲2回、伯耆2回

出雲国に到着した場合、島根郡に安置供給される。→島根郡・出雲国府が9世紀の日本の対渤海関係の前線。

→航路の変更か・・渤海・新羅関係の変化が背景

8世紀 日本海中央部を横断 →北陸、北に流され出羽

9～10世紀 朝鮮半島東岸南下→隠岐近海 → 越前・加賀

↓ 出雲・伯耆

・日本政府の基本方針―北陸(越前・能登)を中心とする。渤海客館は越前、能登に設置。遣渤海使の出航地も北陸。

しかし、頻繁な山陰への来着・・偶然の漂着ではなく、意図的で渤海にとって都合がよかったのではないか？

(2)出雲に到着した渤海使の具体例

1) 弘仁5年(814)来日の王孝廉

・弘仁5年9月末に出雲に到着(『日本後紀』)。出雲に安置供給。年末入京。

・弘仁6年正月、元日朝賀、七日節会などに参列。国書献上の儀など。

・弘仁6年正月22日、出京。出雲へ。

この間に日本側と漢詩を唱酬。→『文華秀麗集』に採録。

渤海側、王孝廉5首、釈仁貞1首

日本側、滋野貞主(『文華秀麗集』の編者)1首、桑原腹赤1首、坂上今継1首、坂上今雄1首

王孝廉の1首は帰国待ちの間、出雲で作ったもの。

従出雲州書情、寄兩箇勅使。一首。 王孝廉

出雲州^{よこつ}従^{しる}り情^{りやう}を書し、兩箇^{りやうこ}の勅使に寄す。一首。 王孝廉

南風海路速帰思。^{なんふうかいろくきし}南風海路帰思を速し、

北雁長天引旅情。^{ほくがんちやうてんりょじやう}北雁長天旅情を引く。

頼有錯錯双鳳伴。^{らいはひしやう}頼に錯々なる双鳳の伴ふこと有り、

莫愁多日住辺亭。^{うれなかつへんてい}愁ふること莫れ多日辺亭に住まふを。

・弘仁6年夏、渡航に失敗、越前に漂着。病死(6月14日)。

・弘仁7年5月2日、副使高景秀ら、越前から帰国。

2) 弘仁5年の出雲についての渤海使

・渤海使への供給・・延喜式に規定あり。

延喜式規定にもとづいて、渤海使一行100人が3か月滞在したときの供給量を試算すると

→稲2万5200束。 cf. 延喜式規定の出雲国正税稲は26万束

王孝廉らは、弘仁5年10～12月中旬、6年2～5月ごろに出雲に滞在したと推測される(約半年)。

→出雲国府の年間財源の4割程度に相当する額。

・俘囚の反乱

出雲に移配された俘囚、弘仁5年初に反乱、2月には鎮圧(『日本後紀』)。

弘仁5年5月、被害をうけた意宇・出雲・神門3郡の未納稲16万束を免除(『日本後紀』)。

弘仁5年11月、「賊乱及供蕃客」により出雲国の田租免除。

(3)渤海以後・・日本海側の限界

・渤海滅亡→交流断絶

・国家間の公的関係を基軸としたため、一方の国家の消滅と同時に関係も途絶→東シナ海域とは対照的

・東シナ海域の発展 9世紀以降

新羅・唐商人、10世紀以降は呉越、宋、高麗商人らの活動拡大

国家間の公的関係に依存しない大宰府・半島・大陸間の交易活動拡大

・日本海側 民間商人の活動なし→渤海の消滅=交流の途絶

古代の日本海域は、東シナ海域のような交通や経済の段階段階に達していなかった。

→中世の日本海沿岸交通、流通の展開のなかで、山陰地域と朝鮮半島との国際交流が再開していく。